

21世紀の公衆衛生

—未来志向 Future Based の環境行動—

ノジリ マサミ*
野尻 雅美*

Key words : 21世紀の公衆衛生, 未来志向, 環境行動

I 20世紀から21世紀の公衆衛生へ

世紀末を迎え、いよいよ21世紀への橋渡しである。そこでこの機会に20世紀の公衆衛生を地球レベルで振り返り、21世紀の公衆衛生の進むべき方向を、私見として述べてみたい。

20世紀の公衆衛生は、「アメニティを求めての研究であり活動であった」、とすることができる。飛躍的な科学技術の進歩に支えられ、世紀当初には思いもよぬ輝かしい成果となり、その恩恵を、少なくとも先進国では、存分に享受するまでになった。その限りなき欲望は、今もアメニティを追い求めている。

20世紀末の地球は科学技術の進歩を謳歌している人たちが溢れ、その生活基盤である地球環境は瀕死の状態に陥っている。いわゆる地球環境問題である。このことについては一部の識者たちによって世紀半ばから警鐘として鳴らされていたが、世紀末が近づくとつれ、いよいよ現実となった。

ところがその理解であるが、一般的には表層的で深刻な受け止めはされていない。それどころか逆にその現実から意識的に目をそらし、できることなら見ないで済ませたいとしている。というのもその解決にはアメニティを制限し、ないしアメニティに逆行を求めるからである。まさに見てみぬふりである。だが現実の薄皮を皮剥いてみよう。そこには惨憺たる地球があるのだ。この“痛めつけられた地球環境の再生”こそが21世紀の最大の課題である。

ここで新しい公衆衛生の出番となる。これまでのアメニティを求めてきた公衆衛生とは異なり、怪しくなりつつある人の生存基盤を安定させる公衆衛生である。そのパラダイムの変更ができるだろうか。万物の霊長たる所以を遺憾なく発揮するチャンスである。

II 疫学的方法論, Evidence Based の有効性

長年にわたり行われている治療や習慣には経験の積み重ねのみで科学的な実証がなされていないものがある。そこですべての実践は科学的に実証された Evidence にもとづいてなされるべきであるという主張がおきてきた。今流行の Evidence Based Medicine (EBM) はこの一つである。Evidence を科学的に実証するとは、すべからず研究は疫学的方法論すなわち集団的科学的的方法論を用い行うべきであるということである。そのベストな方法は実験である介入研究であるが、確率論である分析疫学レベルまでの検討がなされていけば、それでも十分とすべきである。人間を対象とした科学研究は、本来、実験にはなじまなく非実験である観察研究、すなわち分析疫学に止めおく方がより人間的な研究であると考えられ、評価されるであろう。

私はこれまで疫学的方法論を用いて複雑な生活環境の中から各種のリスク要因を、コンピュータの力を借りて、いくつか拾いだしてきた。たばこ肺がん、塩分と高血圧、心房細動と脳梗塞(脳塞栓)などといったリスク要因を解明してきた。そして若干なりとも「関連の整合性」の蓄積に貢献してきた。そしてこれらの蓄積されたデータ、Evidence をもとに、健康行動ないしは健康増進行動を推進し、健康管理を実践している。

* 千葉大学看護学部地域看護学講座保健学教育研究分野
連絡先: 〒260-8672 千葉市中央区玄鼻 1-8-1
千葉大学看護学部地域看護学講座保健学教育研究分野 野尻雅美

Ⅲ 疫学的方法論の限界

しかしながら疫学的方法論は過去のデータの分析である。この過去の研究成果が現在の健康管理に有効である条件は、それが出された時と適用する時の生活環境が大きく変化していないことである。もちろん未来に適用する場合もしかりである。この条件があってこそ Evidence Based は成り立つ。ただしごく近未来に限り、若干の変化があっても、近似的に変化なしと見做し、この条件が成り立つと考える。現在、国民の健康づくりに広く推奨されている健康行動ないし健康増進行動もこの疫学的方法論による成果に依っている。だが、この条件が満たされないときはどうなるのだろうか、それは単なる過去の遺物である。

疫学研究は結論が得られるまでに多くの研究と長期にわたる研究が必要である。たばこ肺がんの例をもってしかりである。社会の動きが年々加速化していく中で、このような悠長な研究がはたして可能であろうか。まがりなりにも Evidence がでる頃には、社会は進み、むなしの後追いとなる可能性がある。

これまでに何度かあった母乳哺育がよいか牛乳哺育がよいかの論争はどうやら母乳に軍配が上がったようである。だがこれは母乳にダイオキシンなどの環境ホルモンが入っていない時の論争である。時代が変わって母乳に環境ホルモンが相当量混入しているとなると、母乳がそのまま推奨されるかははなはだ疑問となる。新たな研究をして結論をだし直さねばならない。その Evidence を得るにはまたまた膨大な研究の積み重ねが必要となる。そんな Evidence を悠長に待ってられるだろうか。行動は今すぐとらねばならない。疫学的方法論の限界である。

Ⅳ 未来指向 Future Based の意思決定

トレンドが過去から未来へ大きく変わる状況下での判断は Evidence Based には頼れない。右肩上がりの時代に得られた知見は、右肩下がりの時代には適用できない。そこで新たな Evidence をつくらねばならないのだが、それには膨大な労力と時間が費やされる。そのようなときに立ち至った場合には、どのように判断し行動をとるべきかである。

従来が発想で突破できない難関に直面した際の対処法は、発想を転換し、新しい発想で立ち向かうしかない。それは大改革ブレイクスルーである。「研究の枠組みを変えてみよう」、「研究の路線を変えてみよう」、「研究のシナリオを書き変えてみよう」。どのように変えればよいのであろうか。

それにはまずは現存する未来予測に関するデータをできる限り集める。それをもとに未来のある時点での未来像を想像力たくましく描く。ここが研究者の力量である。その未来像が描けたら、よく見えるように、その像をかぎりなく現在に引き寄せてみよう。そのようにならないために（あるいはそのようになるためには）、今、現在、何をなすべきか、どうすればよいか、少し考えると見えてくる。それを果敢に行動に移す。これが Evidence など求めようにもまったくないときの決断、Future Based の決断である。

人口推計を用いて未来の超高齢化社会を描くことはよくある。その時の社会はどうなっているのだろうか、いろいろと思いを巡らしてみる。それに向かって今、どう対処するとうまくいくかを考えてみる。健康保険制度の行き詰まりを目前に、公的介護保険制度の導入にふみきったのは、まさにこの手法である。

しばしばだされた解は、即座には受け入れられない。Evidence にもとづくものではなく、勘やひらめきによるからである。ときに現実と大きく乖離して、無理を通さねばならない。大きな賭である。だが摩擦をなるべく少なくするために、どの程度の離れなら合意が得られるのか、手を打てるかを決め直す。「呼び戻し」である。公的介護保険でも若干の緩和策がとられ、着地点を少し遠くに引き離し、めでたく決着した。

歴史から学ぶのでなく、「未来から学ぶ」のである。そして決断するのである。これが“未来志向 Future Based の意思決定 Decision Making”である。

Ⅴ 21世紀の公衆衛生、未来志向 Future Based の環境行動

地球環境に関する指標は、どれをとっても世紀末になるにつれより厳しくなっている。

世界人口はどこまで増えるやら、そして皆が先

進国並みのアメニティを求めるとしたら、それを充すだけのそんな資源はあるのだろうか。それに伴う環境汚染はどうなのか。地球の温暖化は現実となっている。各地で高温の記録が更新されている。南極の水が急速に溶けだし海面が上昇している。地球の温度はどこまで高くなるのか。生存のための食糧は確保できるのか。生存環境の悪化と狭隘により姿を消す動物たち。環境ホルモンによる地球汚染も不気味である。自然界でみられる雄の雌化現象、ペニスが小さくなりセックスが不能になった動物種。人の精子数の減少が不気味に現実化しているようだ。

地球破壊の元凶が私たちのアメニティを求めた結果であるとしたら、どんな行動をとったらよいやら、自ずとその解は見えてくるはずである。私たちは自分たちの子や孫にそんな地球を遺産としてよいのだろうか。これまでの“前へ前へ”突っ込みの科学技術の路線に期待する半面、“一步引いて”の地球環境保全の路線も選択肢の一つとして前面にでてきている、それも重みをもって。その選択も両極の二者択一ではなく、「呼び戻し」により、両者の間のどこかにランディングさせることになろう。

21世紀は“環境の世紀”である。地球環境の保

全があればこそアメニティが追求できる。21世紀の公衆衛生は、地球環境の再生が最優先の課題であり、未来志向 Future Based の環境行動のもとで、“新しいアメニティ”を追求すべきと考える。

(受付 2000. 2. 7)
(採用 2000. 3.14)

文 献

- 1) レーチェル・カーソン. 青樹繁一, 訳. 生と死の妙薬 (沈黙の春), 新潮社, 東京, 1964.
- 2) メドウズ. D. S. 他. 大来佐武郎, 監訳. 成長の限界, ダイアモンド社, 東京, 1972.
- 3) シーア・コルボーン, 他. 長尾 力, 訳. 奪われし未来, 翔泳社, 東京, 1997.
- 4) レスター・R・ブラウン, 編著. 松下和夫, 浜中裕徳, 他監訳. 地球白書 88-89~99-00, ダイアモンド社, 東京, 1989~1999.
- 5) 日比野省三. プレイクスルー思考と公衆衛生, これからの公衆衛生のサイエンスとアート, 第57回日本公衆衛生学会総会実行委員会, 岐阜, 1998.
- 6) 野尻雅美. 21世紀は生態的健康観で—健康行動と環境行動—エコヘルス. 日本健康医学会雑誌 6(2), 1997.
- 7) 野尻雅美, 編著. 保健学—疫学, 保健統計—, 真興交易医書出版部, 東京, 1999.